

## モンゴルにて

岡本 祥一 予科5-7  
航空16-4通信（川口市）



蒙古服の私と家内

### まえがき

時には非日常性を求めて旅に出るのもよいものである。6月中旬モンゴル共和国の首都ウランバートルを中心とした観光ツアーに参加する機会を得た。

茫漠とした大平原、そして遙かかなたの山裾に見える羊の群れ、文明国への旅とは全く質の異なる、茫漠とした印象であった。

成田発ウランバートル行き、週1便（土曜日のみ）、モンゴル航空の直行便で約5時間。満員であった。サービスは中国の航空便より良い。

### ウランバートル市街

ウランバートルはモンゴル高原のほぼ中央に位置し、全人口約273万人の約半分、122万人が居住、極端な一極集中となっ

ている。

モンゴル共和国は多彩な歴史を経て、現在は社会主義の呪縛から解き放たれ、大統領制による民主化が進み、経済は自由化されている。

折から国会大会議総選挙の最中であった。大きな立て看板が人目を引いていた。しかし街頭演説はついぞ見かけなかった。ガイドによれば、旭鷲山が立候補しているとのこと。但し前回当選した後あまり仕事をしておらず、今回は落選であろうと予想していた。やはり落選し、朝青龍の兄も落選したとのことである。

朝青龍はウランバートルでサーカスを経営しているらしい。大金持ちなので金儲けはせずに国民に奉仕するのではないか、政治家としての将来を期待しているとのガイドの説明であった。

市街は都市計画の遅れが目立ち、自由化の進展に伴う車の氾濫で渋滞がひどい。また道路の補修も十分でなく、穴だらけで砂塵もうもう、バスによる観光は大きな苦勞を伴うものであった。乗用車の大半は日本の中古車であった。

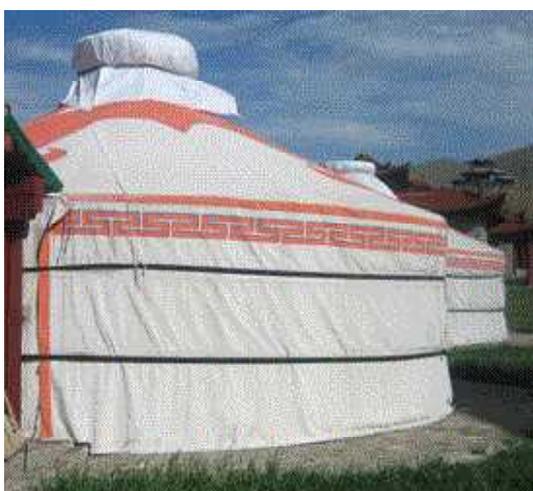
滞在の最終日、市街中心に歩を進めた。チベットのラマ教に属するカンダン寺、活佛の冬の宮殿（20世紀初期の建立）などは特に印象に残るものではなかった。ただ、自然史博物館に陳列されていたゴビ砂漠で採集された恐竜の化石、特に世界で最初に発見された恐竜の卵は一見の価値がある。

市庁舎前の広場に出た。向かい側にピンク色の瀟洒な建物が目に入る。シベリヤ抑留者の一部がここでオペラハウスを建設したとの説明であった。抑留者の中にこのような立派な建物を造営出来る技術者がいたのだろうか。彼らの苦勞がしのばれた。

夕方近く、市内最大の「ノミン」デパートで買い物を楽しんだ。唯一の土産物としてモンゴルの蜂蜜を購入した。これは良い

買い物であった。

最初に宿泊したホテルの客室はゲル（写真一）で、普通のホテルの客室に比べ異質でやや粗雑であった。特筆したい点は鍵である。10日間の旅行中、2軒の一流ホテルでは、「鍵」が極めて粗末で開閉に大いにてこずった。うっかりすると外からカギがかかり外に出られなくなる。また鍵がなかなかかからない。遊牧民の伝統で、鍵をかける習性がなかったためとのガイドの説明であった。



写真一 宿泊したホテルのゲル

食事は肉食が中心らしいが、旅行者にはかなり注意を払っていたようである。予想していたよりも野菜類が豊富であった。しかし、ほとんどの野菜は輸入品とのことであった。

そういえば、広い草原を走行中に、畑らしきものはいそ見かけなかった。ただ野菜の人工栽培、あるいは小麦農場の開発を始めているとのことであった。

ある日、高級料理店の夕食は牛肉のステーキであった。両面真っ黒焦げ、しかも堅くて筆者には食べられなかった。モンゴルではレアステーキはレシピにないのであろう。

また、斧で断ち切り塩ゆでした羊肉を骨までせせる食事は豪快ではあったが、子羊

の柔らかいらム肉にはついそお目にかかることは出来なかった。

晩酌はモンゴルビールと輸入ワインであった。ウオッカに類似の蒸留酒もあったが敬遠した。有名な馬乳酒は家庭でつくるものらしく、市販されていなかった。ガイドの好意で馬乳酒を飲む機会があった。アルコールは2%程度、酸っぱいヨーグルトといった感じで、子供も大量に飲むらしい。健康に良いとの話であった。

## ハルハ川

ガイドのモンゴル地形についての説明にハルハ川の一語が耳に響いた。ハルハ川の名前を聞いて少年のころを思い出す人も多いのではないか。



ノモンハン付近要図

1939年5月に起きたノモンハン事件の発端となった川である。当時我々は12～13歳の少年であった。

関東軍は満洲国とモンゴルの国境としてハルハ川を主張していた。対してソ連・モンゴル側はハルハ川よりも満洲側に国境線があると主張し譲らなかった。開戦初期、関東軍はハルハ川を突破する勢いであったが、結局は後退を余儀なくされた。この戦いに際し、スターリンは強力な機甲部隊を

準備しモンゴル軍と共に関東軍と対峙した。その頃の世界情勢、また戦闘の経緯については「偕行誌」に近現代史研究会報告として多くの論文が掲載されている。また平成21年9月には近現代史研究特別委員会による「ノモンハンシンポジウム」が開催されている。

ノモンハン事件をきっかけとしてモンゴルではソ連への信頼が深まり、日本への嫌悪感が定着した。ただ最近では朝青竜、白鵬らモンゴル相撲の大活躍で親善の機運が改善されつつある。

## チンギス・ハーン

モンゴル—蒙古と言え、日本人の誰でも英雄としてのチンギス・ハーンを思い起こすに違いない。しかしモンゴルでは事情を異にする時代があった。

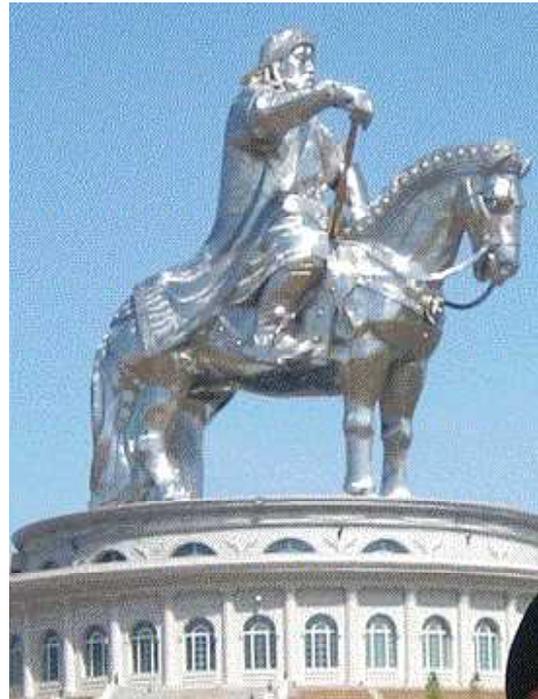
13世紀前半、チンギス・ハーンによる大西征、その遺志を継いだ第2代ハーン、オゴタイによる欧州大遠征は、ロシア各都市にも殺戮と略奪による甚大な被害を与えた。

そのため、近代の一時期、モンゴル政権のソ連政権への思惑、遠慮からペレストロイカによるソ連崩壊（1991年）までは、チンギス・ハーンを祀ることに強い制約があった。例えば、生誕したとされる地に、生誕記念碑を建立（1962年）した学者、政治家の中には死刑にされたものもいたそうである。記念碑の建立は困難を伴うものであった。

現在のモンゴルでは、チンギス・ハーンは歴史的英雄として再評価され、ウランバートル郊外に、実に巨大な乗馬像が建設されている。全て純ニッケル板金加工、一部には金メッキが施され、モンゴルの金属資源の豊富さを見せつけられた感じである。

周知のとおり、チンギス・ハーンは第5

代後裔フビライは1274年（文永の役）、続いて1281年（弘安の役）我が国に向けて大軍を差し向けた。しかし九州、四国の武士の激しい防戦と神風に遭い、逃げ帰った。その後、元は次第に衰え、1368年明の朱元璋により首都北京から追い出され、次第に世界の歴史から姿を消すことになる。



巨大なチンギス・ハーンの騎馬像

## 大草原でのゴルフ

第4日目夕刻、大草原を横切るただ1本の無舗装の悪路に2時間以上揺られ苦しみながら、日本人経営のホテルに到着。

見渡す限り、何も無い。10頭前後の馬の群れを見るだけである。周囲は、黄色を帯びた土、そして高さ10cm程の草がまばらに生えているだけで、荒野、広野の連続である。なぜこんなところに立派なホテルを建てたのか。社会との煩わしい関係をしばらく断ち切って、思索にふけりたい人には適当な場所であるかもしれない。結構予約申し込みがあるとのことであった。

翌日、午前中は自由行動とのこと。見るべきものは無く、することも無く、散歩だけが取り得る自由行動である。

支配人が見かねて声をかけてくれた。ゴルフクラブが一組ある。ゴルフはどうかと言うのである。いずれは周辺をゴルフ場にしたいとのことであったが、まだ何もない。

ただ歩くよりは、ボールを転がしながら行くのもよいであろうと、ショートアイアンを握り、家内と歩きだした。目標とする旗もホールも無い。勝手気ままの方向に打ち出すのである。打った感じはバンカーとラフとの間で、思うようにはボールは飛ばない。せいぜい50ヤード程度で、球を見失うことは無い。

結構楽しかった。2時間程歩きまわったところ、天候が一転、大粒のしずくが落ち始めた。ホテルは遙か彼方である。もちろん傘は無い。走りたくても体が言うことを聞かない。助けを呼ぼうにも声が届く距離ではない。そこに支配人が状況を察知し、カートで迎えに来てくれた。ずぶぬれの悲劇はどうやら逃れることが出来た。感謝、感謝。

支配人によれば我々夫妻がホテル創立以来ゴルフを楽しんだ最初であるとのこと。大草原でのゴルフ、天候の激変、二度とは味わえない生涯の楽しい思い出となった。

## あとがき

「13世紀と20世紀のある期間を除いては、長い日蒙の歴史のうえでの交渉は全くなかった」。司馬遼太郎の「モンゴル紀行」にある一節である。近年では、この文章に相撲を通じてのモンゴル人大活躍を付け加えねばならない。

旅行中、横綱白鵬の父親に会う機会があった。人里離れた小高い山の中に道場を作り、モンゴル相撲を志す若者の指導にあた

っているのである。若者は30～40人はいたであろうか。この中にやがて我が国で活躍する者も出るのではないか。穏やかな好々爺の印象であったが、若者を見る目は厳しかった。

往復の機中、かなり日本人の単独旅行者を見かけた。聞くところによると、多くは金属資源探査の会社関係者とのことであった。モンゴルはウラン鉱石をはじめ、レアメタルの宝庫と言われ、未開発資源に多くの関係者の目が注がれている。

相撲を通じて日蒙関係の改善が進んでいる今、資源を含む開発協力を通じて一層の親善強化が図られることを強く望み、擱筆する。(H.24.8.)